



田川郷土研究会 会長

中野 直毅さん(伊方)

「第8次測量で田川地域を測量した忠敬は68歳。19人の測量隊を地元の各村々が支え、支援隊は1日200人以上にのぼったと考えられます」。伊能忠敬研究会の会員でもある田川郷土研究会会長の中野さんは「まさに国家プロジェクトとも言える大事業でした」とその偉業を讃えます。地図の精度の高さを求めた忠敬は、困難な地でも限界まで足を踏み入れ、逆側からも測り直す「見返り測量」など作業に余念がなかったといいます。「何度もベストな作業を繰り返した忠敬。コツコツと努力を積み重ねることの大切さや偉大な価値観を多くの子どもたちに知ってほしいですね」。忠敬が歩いた道をたどりながら、忠敬の足跡を広く伝えています。

努力積み重ねる
忠敬の価値観を
次代へ伝えたい



10月8日の「伊能忠敬の歩いた道ウォーキング」で講師を務める中野さん。



忠敬が歩いた道
「伊能図を見ていくと江戸時代の道が見えてきます。その道沿いには確かに古いものが並んでいて、昔の風景が浮かび上がってきます」と中野さん(写真右)。田川市で忠敬が歩いた道を120人の参加者とたどりました。



point 2 金田村と弁城村を測量日記に記す 船通行の要所として金田村を認識

度目の九州測量となった第8次測量で伊能隊が田川地区を測量します。文化10年(1813)10月10日の測量日記で「川下は筑前遠賀川、これより一里川下金田村まで芦屋より船通行、左五丁山根に当領弁城村、岩窟、テ所方二間半の入口にて奥の深さ知れ難し」と忠敬が伝聞を記しています。実際に福智町では測量していませんが、基本的に自らが目にしたものしか記録しない忠敬が、わざわざ書き残したことから、要所として認識していたことがうかがえます。



金田村と弁城村の記述がある測量日記。「伊能忠敬測量日記23巻」より一部抜粋(伊能忠敬と伊能図の大事典をつくる会)



point 4 実測による高い正確性と美しい地形描写 明治の日本の近代化に貢献

忠敬が作った地図、通称「伊能図」は、縮尺の異なる大図・中図・小図の3種類のほか、名勝地を絵画のように描いた特別図などがあります。いずれの地図も実測による高い正確性を持ち、地形描写には日本画の手法が用いられ、美しさも兼ね備えた仕上がりです。江戸時代には一般公開されなかった伊能図でしたが、幕末から明治にかけて、伊能図を基にした近代的な地図がさまざまところで作られ、明治の日本の近代化に大きく貢献しました。



伊能図を原図に明治陸軍参謀局が作成した九州北部地図。(「伊能中図 九州北半」一部抜粋/国土地理院)



point 1 忠敬にとって覚悟の九州測量 複雑な海岸線の地形と老いに苦戦

本州四国の測量を終え、いよいよ九州に向かった伊能隊。しかし、複雑な地形や老いが忠敬を苦しめます。当初、九州を1回でまわる予定でしたが、第7次、第8次と測量は2度に及びます。特に第8次測量の所要日数は914日と、10回の測量行のなかで最長となりました。忠敬にとって、2度目の九州測量は覚悟の遠征でもあり、齢70を目前にした忠敬は、出発前に遺言状ともいえる手紙を家族に宛てていました。



point 3 伊能隊による測量技の集大成 極めて精度の高い九州地図

先手隊、後手隊、支援隊といった伊能隊の組織的な測量により、極めて精度が高いといわれる九州測量。足掛け17年に及ぶ全国測量が完了した後、日本全図の製作に取り掛かった忠敬ですが、地図の完成を見ずに73歳で亡くなります。しかし、忠敬の死は公表されないまま、3年後に弟子たちの手によって完成され「伊能忠敬」の名前で幕府に提出されました。



二度にわたったが驚異的な精度を誇った九州測量。(「伊能図 九州全図」一部抜粋/松浦史料博物館)



二度にわたる 最長の! 九州測量

忠敬の全10回に及ぶ測量行程の中で最長となった九州測量。その第8次測量でいよいよ伊能隊が田川地域を測量します。



田川を記した伊能図、中央部に福智山が確認できる。(「伊能図 筑前 豊前 小倉 長門 赤間関」一部抜粋/国土地理院)